

## 大学生の不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本, ソーシャルサポート認知との関連

上田敏子\* 窪田辰政\*\* 宗像恒次\*\*\*

\* 愛媛大学教育学部 \*\* 静岡産業大学経営学部

\*\*\* 情動認知行動療法研究所所長 筑波大学名誉教授

### Relationships among Anxiety Tendency, Negative Self-image-script and the Recognition of Social Support for University Students

\*Toshiko Ueda \*\*Tatsumasa Kubota \*\*\*Tsunetsugu Munakata

\* Faculty of Education, Ehime University

\*\* Faculty of Management, Shizuoka Sangyo University

\*\*\* Chair, Institute of Emotive Cognitive Behavioral Therapy  
and Professor emeritus of University of Tsukuba

#### <要旨>

本研究は大学生を対象に不安になりやすい傾向とネガティブ自己イメージ脚本, ソーシャルサポート認知との関連を検討した。大学生 525 名(男性 308, 女性 217)を対象に質問紙調査を実施した。不安になりやすい特性は不安気質と特性不安で測定し, ネガティブ自己イメージ脚本は自己否定感と抑うつ尺度から測定した。ソーシャルサポート認知は父母, きょうだい, 友人, 学校の先生からの情緒的ソーシャルサポートを示す。共分散構造分析を行ったところ, 以下のことが明らかとなった。1) 不安になりやすい特性はネガティブ自己イメージ脚本に正の影響を及ぼし, ソーシャルサポート認知に負の影響を及ぼす。2) ソーシャルサポート認知はネガティブ自己イメージ脚本を抑制する。以上より, 不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本, サポート認知との関連が明らかとなった。不安になりやすい特性が強い場合は, 不安へのセルフケア行動を実施し, 不安になりやすさをコントロールすることが必要といえる。

#### < Abstract >

The purpose of this study is to examine the relationships among anxiety tendency, negative self-image - script and the recognition of social support for university students. We conducted a questionnaire survey of 525 university students (308 males, 217 females). Anxiety tendency was measured on the basis of the score of the recognition of inherited anxious temperament and Trait Anxiety, negative self-image script was measured for the score of self-denial and depression, the recognition of social support was measured on the basis of the scores of emotional social support: from the father, mother, brothers and sisters, teachers and friends. Covariance structure analysis indicated that (a) anxiety tendency positively correlated with negative self-image - script, and negatively correlated with the recognition of social support, (b) the recognition of social support negatively correlated with negative self-image - script. From above, it was indicated that the university students who had anxiety tendency had negative self-image - script and poor recognition of social support. Accordingly, it is necessary for students with anxiety tendency to enhance their ability to control their anxiety by taking self-care activities that improve self-image.

|               |                                   |
|---------------|-----------------------------------|
| キーワード         |                                   |
| 不安特性          | anxiety tendency                  |
| ネガティブ自己イメージ脚本 | negative self-image - script      |
| ソーシャルサポート認知   | the recognition of social support |
| 抑うつ           | depression                        |
| 大学生           | university students               |

## I. 研究背景及び目的

大学生において精神健康の不調が報告されている。たとえば、心気症傾向が漸増していることや<sup>1)</sup>、神経症・抑うつ症圏内に該当する学生の多さが報告されている<sup>2)</sup>。こうしたなか河地<sup>3)</sup>は、自信力に着目した大学生へのインタビュー調査を報告している。それによると、自信力がない学生の理由として、さまざまなつらい経験や自分の性格が嫌いであること等が挙げられている。こうした否定的な自己への評価は「自己イメージ脚本」からとらえることができる。自己イメージ脚本とは、自己認知を再構成する元となるイメージ情報（記憶）であり、自己に対する思い込みを表わすと言われている<sup>4)</sup>。この脚本がポジティブであるか、ネガティブであるかによって精神健康に影響を及ぼすことがこれまでに明らかとなっている<sup>5) 6)</sup>。また、高校生を対象とした調査によると、自傷行為は否定的自己イメージと強く関連することも報告されている<sup>7)</sup>。このように、どのような自己イメージ脚本をもっているかはメンタルヘルスにおいて重要である。

ところで、私たちは多かれ少なかれ不安という感情をもつ。不安とは、「期待通りにいく見通しがつかないときの感情」と定義づけられている<sup>8)</sup>。ルドゥー<sup>9)</sup>によると、不安とは起こるかもしれないことへの恐怖であり、不安と恐怖は有害あるいは潜在的に有害な状況に対する反応であるという。Cloninger<sup>10)</sup>はこうした不安になりやすい特性を気質性格検査（Temperament and Character Inventory: TCI）のうち「損害回避（Harm Avoidance）」という概念でとらえている。これまでに、高い損害回避が抑うつと関連することや<sup>11) 12)</sup>、摂食障害において高い損害回避、低い自己志向性をもつことが報告されている<sup>13)</sup>。

こうしたなか宗像<sup>14)</sup>は、Kretschmerらの気質学、Cloningerの行動遺伝学の成果、類人猿の動物行動学の発展、宗像の臨床行動学の成果を踏ま

え、人間の性格や行動パターンの基盤となる人格気質（循環気質、粘着気質、自閉気質）とその感受性、反応の強さを決める気質（執着気質、不安気質、新奇気質）があるとしている。このうち不安気質は損害回避と正の相関関係にあり、不安気質を含むストレス気質の発現認知が高い場合、自己否定感が高く、精神健康度を悪化させることや<sup>15)</sup>、不安気質の発現認知高群は低群と比べ、自己価値感が低く、自己否定感、自己抑制度、抑うつが高いことが報告されている<sup>16)</sup>。このように、不安になりやすい特性はネガティブな自己イメージ脚本や精神健康度と関連する。一方、ソーシャルサポート認知は精神健康に影響する重要な要因の一つである。これまでに、大学新入生を対象とした調査では高サポート群は抑うつ気分が低く、大学満足度も高いとの報告もある<sup>17)</sup>。しかしながら、不安になりやすい特性がネガティブな自己イメージ脚本やソーシャルサポート認知へ与える影響については十分に検討されていない。不安になりやすい学生の特性を明らかにすることは、メンタルヘルス支援の充実を図る上で重要といえる。

そこで本研究は、共分散構造分析を用いた仮説モデルを構築し、不安になりやすい特性とネガティブな自己イメージ脚本、ソーシャルサポート認知との関連を検討することとした。

## II. 研究方法

### 1. 調査時期及び対象

調査は2009年7月上旬～中旬、無記名自記式の質問紙法により委託調査により実施した。対象は関東・東海地区を所在地とする大学（4校）の学生678名であった。そのうち、欠損値を除いた525名（男子学生308、女性217）を調査対象とした。男子学生（N=308）の平均年齢（±標準偏差）は19.36（±1.63）歳、女子学生（N=217）は18.78（±

1.19) 歳であった。回収率は 96.6% であった。

対象者への倫理的配慮として、調査票のフェイスシートに調査の目的、調査で知り得た情報は統計的に処理されることなどを記載した。なお、本調査は筑波大学人間総合科学研究科研究倫理委員会（課題番号第 21-174 号）の承認を得て行った。

## 2. 測定尺度

### ①自己否定感尺度（10 項目）<sup>18)</sup>

自分に対する否定的なイメージの強さを測定する。得点範囲は 0 ～ 20 点である。

### ②抑うつ尺度（SDS）（20 項目）<sup>19)</sup>

Zung, W. W. K. により作成された自己記入式抑うつ尺度（SDS: Self-rating Depression Scale）の日本語版を使用した。得点範囲は 20 ～ 80 点である。

### ③不安気質尺度（5 項目）<sup>20)</sup>

遺伝的気質尺度のうち不安気質を使用した。得点範囲は 0 ～ 5 点である。

### ④特性不安尺度（20 項目）（STAI）<sup>21)</sup>

STAI（State-Trait Anxiety Inventory: 状態—特性不安検査）の日本語版のうち、特性不安を使用した。得点範囲は 20 ～ 80 点である。

### ⑤学生用ソーシャル・サポート尺度（16 項目）<sup>22)</sup>

項目内容は情緒的なサポートが中心であり、対人関係（サポート源）別に得点を算出する。得点範囲は 0 ～ 48 点である。サポート源は、父、母、きょうだい、今通っている学校の先生、友人・知人の 5 つからなる。

## 3. 分析方法

尺度の信頼性分析は Cronbach の  $\alpha$  係数により算

出した。性差の検定には、対応のない  $t$  検定を用いた。また、相関分析については Pearson の積率相関係数により算出した。

次に、仮説に基づきモデルを構築し、共分散構造分析により検討した。モデルの適合度指数として、GFI, AGFI, RMSEA および AIC について検討した。GFI (Goodness of Fit Index) は 0 ～ 1 の値の値をとり、0.9 以上であればモデルの適合性が高いことを意味する<sup>23)</sup>。次に AGFI (Adjusted GFI) は GFI を修正した値であり、GFI と同様に 0.9 以上であるとモデルの適合性が高いと判断できる。RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) は 0.08 以下であれば適合度が高いことを示す。なお、推定値（標準化推定値）については 5% 水準を基準とした。AIC（赤池の情報量基準: Akaike information criterion）は値が小さいモデルほど優れていると判断する。決定係数 ( $R^2$ ) とは、重相関係数の平方であり、当該内生変数の分散が他の予測変数から説明される割合を表す。なお、統計パッケージは SPSS ver.12 for Windows および AMOS5.0 を用いた。

## III. 結果

### 1. 対象者の特性

各尺度の記述統計量、尺度の  $\alpha$  係数および性差について表 1 に示す。性差について検討したところ、抑うつ ( $t=3.48, p<.001$ )、不安気質 ( $t=3.77, p<.001$ )、特性不安 ( $t=3.23, p<.001$ )、母親からのソーシャルサポート ( $t=3.37, p<.001$ )、きょうだい ( $t=2.76,$

表1 各尺度の記述統計量、尺度の  $\alpha$  係数および性差

| 尺度                   | 全体<br>(N=525)     | 男性<br>(N=308)     | 女性<br>(N=217)     | $\alpha$ 係数 | 性差<br>$t$ 値 |
|----------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------|-------------|
|                      | Mean $\pm$ SD     | Mean $\pm$ SD     | Mean $\pm$ SD     |             |             |
| 自己否定感                | 5.37 $\pm$ 4.78   | 5.18 $\pm$ 4.67   | 5.63 $\pm$ 4.93   | .868        | 1.06        |
| 抑うつ (SDS)            | 43.50 $\pm$ 7.83  | 42.51 $\pm$ 7.80  | 44.90 $\pm$ 7.68  | .781        | 3.48***     |
| 不安気質                 | 4.18 $\pm$ 1.20   | 4.03 $\pm$ 1.34   | 4.40 $\pm$ 0.92   | .671        | 3.77***     |
| 特性不安 (STAI)          | 48.25 $\pm$ 9.11  | 47.18 $\pm$ 9.27  | 49.76 $\pm$ 8.68  | .835        | 3.23***     |
| 学生用ソーシャルサポート (父親)    | 29.96 $\pm$ 12.94 | 29.31 $\pm$ 13.00 | 30.88 $\pm$ 12.83 | .965        | 1.36        |
| 学生用ソーシャルサポート (母親)    | 34.14 $\pm$ 11.41 | 32.75 $\pm$ 11.56 | 36.12 $\pm$ 10.92 | .957        | 3.37***     |
| 学生用ソーシャルサポート (きょうだい) | 27.86 $\pm$ 14.13 | 26.44 $\pm$ 14.01 | 29.87 $\pm$ 14.10 | .970        | 2.76**      |
| 学生用ソーシャルサポート (学校の先生) | 22.72 $\pm$ 12.81 | 22.64 $\pm$ 12.76 | 22.83 $\pm$ 12.92 | .964        | .16         |
| 学生用ソーシャルサポート (友人・知人) | 36.58 $\pm$ 9.84  | 34.25 $\pm$ 10.33 | 39.89 $\pm$ 8.02  | .953        | 7.03***     |

\*\*\*  $p<.001$  \*\*  $p<.01$

$p<.01$ ), 友人・知人 ( $t=7.03$ ,  $p<.001$ ) に性差がみられ, 男性より女性において有意に得点が高かった。

## 2. 不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本, ソーシャルサポート認知との関連

### ①各尺度得点間の相関係数について

男女別に各尺度得点間の相関関係を算出した(表2, 表3)。その結果, 男女とも, 自己否定感, 抑うつ, 不安気質および特性不安の間で有意な正の相関関係が示された。また, ソーシャルサポートとの関連では, 不安気質および特性不安の一部において, 有意な負の相関関係が示された。

### ②全体モデルによる検討

不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本, ソーシャルサポート認知からなる仮説モデルを構築した。「自己否定感」および「抑うつ」の観測変数からなる「ネガティブ自己イメージ脚本」を潜在変数とした。抑うつ尺度 (SDS) は精神健康度の指標でもあるが, 抑うつ感の評価は「抑うつ感をもつ自己イメージ」を評価しているともいえ, 抑うつ (SDS)

をネガティブ自己イメージ脚本の一つとして捉えた。また「不安気質」および「特性不安」の観測変数からなる「不安になりやすい特性」を潜在変数とした。学生用ソーシャルサポートについては, 5つのサポート源の観測変数からなる「ソーシャルサポート認知」を潜在変数とした。「不安になりやすい特性」から「ソーシャルサポート認知」, 「ネガティブ自己イメージ脚本」のパス係数を仮定し, 「ソーシャルサポート認知」から「ネガティブ自己イメージ脚本」へのパス係数を仮定した。母数の制約はすべての誤差変数から観測変数へのパス係数の分散を1に固定し, 潜在変数を構成する観測変数のうち基準とする観測変数の分散を1に固定した。また, すべての攪乱変数から潜在変数へのパス係数の分散を1に固定した。欠損値を除いた525名を対象に共分散構造分析を行った。パラメーターの推定は最尤法により行った。

全体モデルについて分析したところ, 適合度指数は  $GFI=.969$ ,  $AGFI=.939$ ,  $RMSEA=.067$ ,

表2 各尺度の相関関係(男子学生)

|                       | 1 | 2       | 3       | 4       | 5        | 6        | 7        | 8        | 9        |
|-----------------------|---|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1 自己否定感               | 1 | .631 ** | .304 ** | .450 ** | -.277 ** | -.353 ** | -.266 ** | -.123 *  | -.328 ** |
| 2 抑うつ(SDS)            |   | 1       | .332 ** | .683 ** | -.265 ** | -.294 ** | -.192 ** | -.166 ** | -.376 ** |
| 3 不安気質                |   |         | 1       | .442 ** | -.054    | -.037    | -.121 *  | -.115 *  | -.125 *  |
| 4 特性不安(STAI)          |   |         |         | 1       | -.173 ** | -.193 ** | -.188 ** | -.188 ** | -.249 ** |
| 5 学生用ソーシャルサポート(父親)    |   |         |         |         | 1        | .782 **  | .645 **  | .453 **  | .412 **  |
| 6 学生用ソーシャルサポート(母親)    |   |         |         |         |          | 1        | .674 **  | .423 **  | .479 **  |
| 7 学生用ソーシャルサポート(きょうだい) |   |         |         |         |          |          | 1        | .461 **  | .373 **  |
| 8 学生用ソーシャルサポート(先生)    |   |         |         |         |          |          |          | 1        | .383 **  |
| 9 学生用ソーシャルサポート(友人)    |   |         |         |         |          |          |          |          | 1        |

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

表3 各尺度の相関関係(女子学生)

|                       | 1 | 2       | 3       | 4       | 5        | 6        | 7        | 8        | 9        |
|-----------------------|---|---------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 1 自己否定感               | 1 | .638 ** | .182 ** | .505 ** | -.321 ** | -.355 ** | -.189 ** | -.277 ** | -.405 ** |
| 2 抑うつ(SDS)            |   | 1       | .273 ** | .674 ** | -.331 ** | -.331 ** | -.242 ** | -.310 ** | -.389 ** |
| 3 不安気質                |   |         | 1       | .353 ** | -.134 *  | -.041    | -.012    | -.061    | -.125    |
| 4 特性不安(STAI)          |   |         |         | 1       | -.260 ** | -.243 ** | -.165 *  | -.203 ** | -.359 ** |
| 5 学生用ソーシャルサポート(父親)    |   |         |         |         | 1        | .676 **  | .510 **  | .423 **  | .366 **  |
| 6 学生用ソーシャルサポート(母親)    |   |         |         |         |          | 1        | .576 **  | .366 **  | .389 **  |
| 7 学生用ソーシャルサポート(きょうだい) |   |         |         |         |          |          | 1        | .344 **  | .370 **  |
| 8 学生用ソーシャルサポート(先生)    |   |         |         |         |          |          |          | 1        | .355 **  |
| 9 学生用ソーシャルサポート(友人)    |   |         |         |         |          |          |          |          | 1        |

\*  $p<.05$ , \*\*  $p<.01$

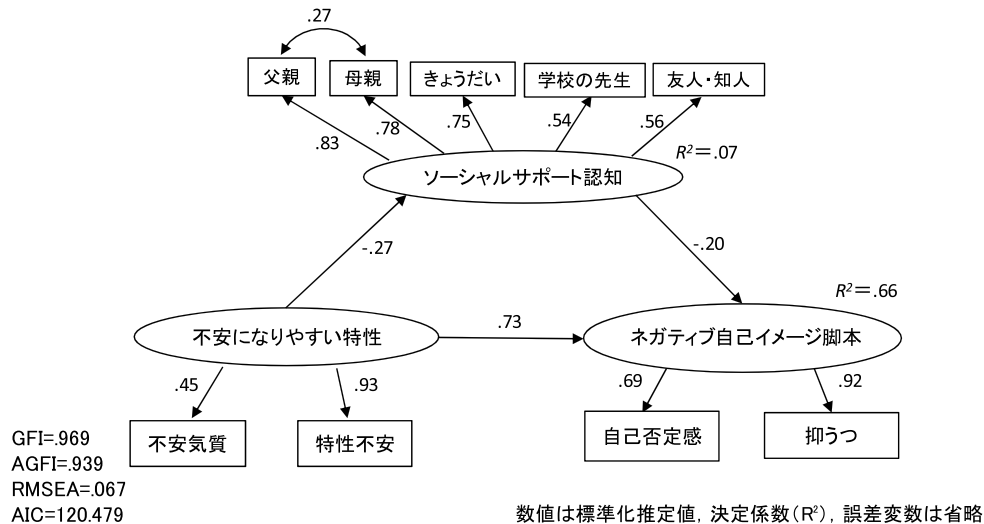


図1 大学生全体(N=525)における不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本, ソーシャルサポート認知との関連

AIC=120.479 であり, あてはまりの良いモデルであった (図1)。パス係数についてみると, 「不安になりやすい特性」から「ネガティブ自己イメージ脚本」に対して .73 を示し, 「ソーシャルサポート認知」に対しては -.27 を示した。また, 「ソーシャルサポート認知」から「ネガティブ自己イメージ脚本」に対しては -.20 を示した。決定係数は, 「ソーシャルサポート認知」が  $R^2 = .07$ , 「ネガティブ自己イメージ脚本」が  $R^2 = .66$  であった。

以上より, 不安になりやすい特性はネガティブ自己イメージ脚本に正の影響を及ぼし, ソーシャルサポート認知を抑制する関係にある。また, ソーシャルサポート認知はネガティブ自己イメージ脚本を抑制することが示された。

### ③多母集団分析によるモデルの検討

#### 手順1: 母集団ごとの分析

男女の母集団間における差異の有無を検討するため, 多母集団分析を行った。はじめに男女ごとに分析を行ったところ, 男女とも標準化推定値はすべて有意であり, 男子学生 (N=308) では, 適合度指数は GFI=.948, AGFI=.899, RMSEA=.087, AIC=120.831 であり, 決定係数は, 「ソーシャルサポート認知」が  $R^2 = .07$ , 「ネガティブ自己イメージ脚本」が  $R^2 = .63$  であった。一方, 女子学生 (N=217) では, 適合度指数は GFI=.962, AGFI=.925,

RMSEA=.059, AIC=84.203 であり, 決定係数は, 「ソーシャルサポート認知」が  $R^2 = .14$ , 「ネガティブ自己イメージ脚本」が  $R^2 = .69$  であった。

#### 手順2: 配置不変の検討

モデルの配置不変性について検討したところ, モデルの適合度指数は GFI=.954, AGFI=.909, RMSEA=.054, AIC=205.024 であり, 本モデルは両母集団に共通して適合が良く, 配置不変性が成り立つと考えられた。

#### 手順3: 等値制約

「不安になりやすい特性」から「ネガティブ自己イメージ脚本」へのパス係数に等値の制約を置き, モデルの適合度の変化を検討した。その結果, モデルの適合度指数は GFI=.951, AGFI=.906, RMSEA=.056, AIC=209.383 を示した。

以上, モデルの適合度について検討した結果, 適合度指数のうち AIC については全体モデルと比べ, 値が大きくなっていた。これらの結果より, 本研究では全体モデルを採択することが妥当といえる。

## IV. 考察

不安になりやすい特性はネガティブ自己イメージ脚本を高めることが明らかとなった。これまでに, 対人恐怖心性において失敗への強い恐れや否定的自己観があることが報告されている<sup>24)</sup>。また, 不安気質

の項目の一つにある神経質傾向は、思い込み傾向を増加させ、抑うつ症状をもたらすことや<sup>25)</sup>、女性において高い損害回避が抑うつを生起させる可能性が報告されている<sup>26)</sup>。さらに、不安や抑うつを引き起こす共通の認知として、過去から現在までの自己をネガティブに評価する要因も報告されている<sup>27)</sup>。このように、不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本との関係は先行研究を支持するものとなった。不安になりやすい特性は、危機への恐れを表している。その恐れが強さがあるため、良い予期よりも悪い予期をしがちであり、そうした特性がネガティブな自己イメージ脚本に影響していると考えられる。

次に、不安になりやすい特性はソーシャルサポート認知を抑制することが明らかとなった。これまでに、対人不安意識の著しい者はあらゆる面で自己や家庭、環境をネガティブにとらえることや<sup>28)</sup>、社会不安の高い児童は社会性が乏しく、交流が少ないという報告もある<sup>29)</sup>。このように、不安になりやすい特性の高さは他者認知に影響し、ソーシャルサポート認知を抑制する関係を示したと考えられる。このことは不安気質の特徴から考察できる。不安気質の特性の一つとして、本質的に孤独で恐怖感の中にいる存在であるといわれている<sup>30)</sup>。こうした恐怖感の強さがあるため、家族や友人、学校の先生といったサポート源があったとしても、容易に信用できず、サポート認知が低いと考えられる。

他方、ソーシャルサポート認知はネガティブ自己イメージ脚本を抑制することが明らかとなった。ソーシャルサポートのうち、特に本研究で用いた情緒的ソーシャルサポートの重要性についてはこれまでも数多く指摘されている。たとえば、サポートが多い学生ほど孤独を感じていないことや<sup>31)</sup>、友人によるサポートが抑うつを低減することなどが報告されている<sup>32)</sup>。ところで、本研究で用いた学生用ソーシャル・サポート尺度は、「あなたに何かうれしいことが起きたとき、それを我が事のように喜んでくれる」という項目が示すように、被受容感の高さを測定している。こうした被受容感があれば安心感を得て、ポジティブな自己イメージ脚本をもつことができる。一方、このソーシャルサポート認知は不安になりやすい特性から抑制される関係にある。したがって、第一に不安になりやすい特性

を理解し、そうした特性への対処法を学ぶことが重要といえる。そのことがひいては自己イメージ脚本の改善やソーシャルサポート認知の向上に影響すると考えられる。

多母集団分析の結果、仮説モデルに男女差がみられなかったことについて、男女別の尺度得点をみると、性差がみられたのは一部であった。こうした結果からも、本モデルを全標本モデルとして検討することが妥当といえる。

## V. 研究の限界

本研究の対象者は、自己否定感が強く、抑うつ、不安気質、特性不安が高い傾向にある集団であった。したがって、本研究結果を一般化することには限界がある。今後は対象者を増やし、心理尺度との関連を検討していきたい。

## VI. 結論

本研究は大学生を対象に不安になりやすい傾向とネガティブ自己イメージ脚本、ソーシャルサポート認知との関連を検討した。大学生 525 名（男性 308、女性 217）を対象に質問紙調査を行い、大学生の不安になりやすい特性とネガティブ自己イメージ脚本、ソーシャルサポート認知との関連を検討するため共分散構造分析を行った。その結果、1) 不安になりやすい特性は、ネガティブ自己イメージ脚本に正の影響を及ぼし、ソーシャルサポート認知に負の影響を及ぼす。2) ソーシャルサポート認知はネガティブ自己イメージ脚本を抑制する。本研究結果を踏まえ、不安になりやすい特性が強い学生に対しては、遺伝的気質の特徴を理解し、その特性に応じたセルフケア行動を提唱するなどの支援が必要といえる。抑うつ予防の観点からも、不安になりやすいという個々の感受性に着目した支援を充実させていくことが重要といえる。

## 謝辞

調査に協力して下さった各大学の先生方ならびに学生の方々に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 坂口守男：学生の精神的・身体的自覚症状の動向 最近 5 年間の UPI でみた推移、大阪教

- 育大学紀要第 III 部門 (自然科学・応用科学), 58:45-55, 2009
- 2) 毛利瑞穂, 數川悟, 竹村祥恵, 引網純一, 成瀬優知: A 県における学生の精神健康調査, 日本社会精神医学会雑誌, 13:41-51, 2004
- 3) 河地和子: 自信力が学生を変える—大学生意識調査からの提言, 58-69, 平凡社, 東京, 2005
- 4) 宗像恒次: 困窮体験が促す本当のライフキャリア形成—SAT 表情再脚本化イメージ法による支援—, ヘルスカウンセリング学会年報, 15:1-12, 2009
- 5) 橋本佐由理, 樋口倫子, 中野智美: 両親イメージが自己イメージに与える影響に関する調査研究, 日本保健医療行動科学会年報, 19:121-138, 2004
- 6) 上田敏子, 窪田辰政, 宗像恒次: 大学生における養育者の嫌悪系表情イメージ表象と自己否定感, 特性不安, 抑うつとの関連, 思春期学, 29:139-146, 2011
- 7) 山口豊, 窪田辰政, 松本俊彦, 橋本佐由理, 宗像恒次: 思春期自傷行為と否定的自己イメージの因果モデルに関する研究, 思春期学, 31:227-237, 2013
- 8) 宗像恒次: SAT カウンセリング技法, 114, 広英社, 東京, 1997
- 9) Ledoux, J.: The Emotional Brain: The Mysterious Underpinnings of Emotional Life, Simon & Schuster Inc, New York, 1996 (松本元, 川村光毅, 小幡邦彦, 石塚典生, 湯浅茂樹 訳: エモーションナル・ブレイン 情動の脳科学, 155, 272, 東京大学出版会, 東京, 2003)
- 10) Cloninger, C. R.: A systematic method for clinical description and classification of personality variants. A proposal, Arch Gen Psychiatry, 44(6): 573-88, 1987
- 11) Grucza, R. A. ; Przybeck, T. R.; Spitznagel, E.L. and Cloninger, C. R.: Personality and depressive symptoms: a multi-dimensional analysis, J Affect Disord, 74: 123-130, 2003
- 12) Nyman, E. ; Miettunen, J. ; Freimer, N. ; Joukamaa, M. ; Maki, P. Ekelund, J. ; Peltonen, L. ; Jarvelin M. R. ; Veijola, J. and Paunio, T.: Impact of temperament on depression and anxiety symptoms and depressive disorder in a population-based birth cohort, J Affect Disord, 131: 393-397, 2011
- 13) Fassino, S. ; Amianto, F. and Abbate-Daga, G.: The dynamic relationship of parental personality traits with the personality and psychopathology traits of anorectic and bulimic daughters, Compr Psychiatry, 50:232-239, 2009
- 14) 宗像恒次, 田中京子, 小林由実: SAT 気質コーチングによる人間関係のコラボレーション, ヘルスカウンセリング学会年報, 13:1-11, 2007
- 15) 瀬在泉, 宗像恒次: 大学生の喫煙行動と自己否定感・ストレス気質及び精神健康度との関連, 日本禁煙学会雑誌, 6:24-33, 2011
- 16) 上田敏子, 窪田辰政, 宗像恒次: 不安気質の発現認知と心理特性との関連, 思春期学, 30:358-364, 2012
- 17) 和田実: 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響, 教育心理学研究, 40:386-393, 1992
- 18) 宗像恒次: SAT 療法, 169, 金子書房, 東京, 2006
- 19) Zung, W.W.K.: A self-rating depression scale, Arch Gen Psychiatry, 12: 63-70, 1965 (福田一彦, 小林重雄: 日本語版 SDS 使用手引き, 三京房, 京都, 1973)
- 20) 前掲書 14)
- 21) Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L. & Lushene, R.E: STAI manual. Consulting Psychologist Press, Palo Alto, California, 1970 (清水秀美, 今栄国晴: STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成, 教育心理学研究, 29:62-67, 1981)
- 22) 久田満, 箕口雅博, 千田茂博: 学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み (I), 日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集:143-144, 1989 (松井豊編: 心理測定尺度集Ⅲ 一心の健康をは

- かる 適応・臨床, 44-52, サイエンス社, 東京, 2001)
- 23) 山本嘉一郎: AMOS による共分散構造分析と解析事例 [第2版] (山本嘉一郎, 小野寺孝義編), 16-17, ナカニシヤ出版, 京都, 2007
- 24) 清水健司, 岡村寿代: 対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討: 対人恐怖と社会恐怖の異同を通して, 教育心理学研究, 58: 23-33, 2010
- 25) Kuyken W, Watkins E, Holden E and Cook W. :Rumination in adolescents at risk for depression, Journal of Affective Disorders, 96:39-47, 2006
- 26) 内藤まゆみ, 木島伸彦, 北村俊則: 抑うつ of の生起に寄与するパーソナリティ特性の性別による相違, 性格心理学研究, 8: 23-31, 1999
- 27) 福井至: Depression and Anxiety Cognition Scale(DACS) の開発 抑うつと不安の認知行動モデルの構築に向けて, 行動療法研究, 24: 57-70, 1998
- 28) 小川捷之, 木村方美, 林洋一: 対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究 (3): 幼少期の家庭環境と自己像に関する比較文化的検討, 横浜国立大学教育紀要, 20: 60-77, 1980
- 29) La Greca A. M. and Lopez N: Social Anxiety Among Adolescents: Linkages with Peer Relations and Friendships, Journal of Abnormal Child Psychology, 26:83-94, 1998
- 30) 前掲書 14)
- 31) 和田実: ストレスとソーシャルサポートが疾病徴候, 孤独感, および学校満足度に及ぼす影響: 看護学生についての縦断研究, 健康心理学研究, 8: 31 - 40, 1995
- 32) Pfeiffer P. N., Heisler M., Piette J. D., Rogers M. A. M. and Valenstein M., "Efficacy of peer support interventions for depression: a meta-analysis" General Hospital Psychiatry, 33:29-36, 2011